

## 猪5 猪の案山子 = = = 猪・鹿・狸より

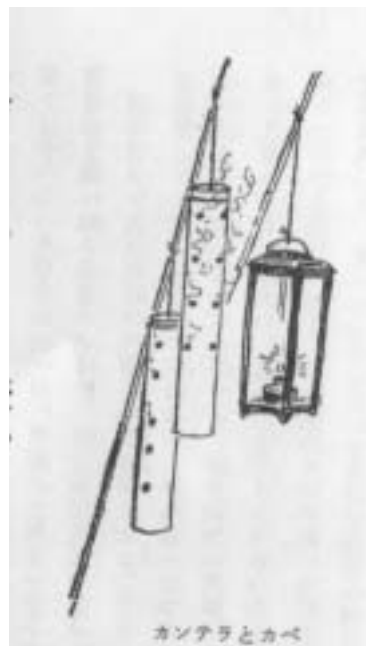


猪のソメ（案山子）のことは、すでに『三州横山話』にも書いた如く、一つ一つ観察すると、ずいぶん変わったものがあった。氏神の祭礼に曳き出した一丈もある藁人形を、後に着物だけ剥いで山田へ持ち込んで立てたのであった。たしか日露戦争の凱旋の年で人形はロシア兵だったと思う。顔を胡粉で彩色した念入りのものだっただけに、遠くから眺めても気味が悪いなどと言うた。また北設楽郡の田峯で実見したものは、藁で馬を拵えて人形を乗せたものがあった。鳥嚇しの案山子などもそうであったが、以前のように蓑笠姿のものなどはほとんど見なくなって、メリヤスのシャツを着せたり、経木細工の防止を被らせたりした。そうかと思うとある家では、昔からある襟のぼろぼろになったのを、こんなものは用はないと言うて、案山子に着せてしまったと言う。現に自分らが聞いた唄の中に、

女郎買いして家の鼻見れば三里やまおく猪のそめ  
とか、あるいは下の句だけ、布里や一色の猪のそめなどと言うのがあった。いずれにしても唄の作者などには、思いも及ばぬ格好であった。

女の髪の毛を焼いて串に挟んで立てたり、カンテラを棒の先に吊るしておいたのと同趣向のもので、古くからあったものに、カベと言うものがあった。ボロを芯にして、上を藁で包んだ、長い苞のような格好だった。一方の端に火をつけて、竹竿の先に吊るして畔ごとに立てておいた。それのごく小さいものを、夏ブヨを除けるために、草刈女などが腰に下げたぐらいだから、ボロのキナ臭い煙で、猪を厭がらせるためだった。あるいはまた太いホダの端に充分火を廻らせて、畔に転がしたのがあった。二つとも少しぐらいの雨には平気で、二日三日ぐらい続けて燃えていたのである。

案山子ではないが、猪除けのワチの変形と思われるものに、山続きの畔から畔へ鉄条網を張り廻したものがあつた。新趣向の一つで、間接には戦争などの影響であつた。しかし結局普通の番小屋に、借入れまで番をするのが、确实でもあり、割合手軽でもあつた。それでわれもわ



れもと新たに小屋を設けて、果ては一目に見通されるほどの窪中に、思い思いの藁小屋が、五つ六つも建ったこともあった。ただ昔と違って来たことは、鳴子の綱を引く代わりに、石油の空缶を叩き、マセ木を打つ代用に、屋根葺用の亜鉛板を持ち込んで叩いたりすることだった。そうかと言うて老人のある家では、昔ながらのマセ木を打っていたのもあった。



マセ木は小屋を中央から仕切って、横に渡した丸太であった。炉にあたりながら手ごろの棒を持って、時折たんたと叩いては、眠い眠い夜を送ったのである。そして合間合間に、ほうほうと呼ばったのである。尻取文句の中に、ホイは山家の猪追いさと言うのがあったが、まさにそれであった。マセの代わりに板を打つのもあったが、寂とした秋の夜の山谷にその音が訝する時は、猪を嚇すに充分だったのである。思えば猪追う術も昔がなお懐かしかった。ましてわが打つマセ木の音に聞き惚れたなどの心持ちは、懐かしい限りであった。

自分が親しくした老人に、八十幾つまで番小屋泊りをやった男があった。息子達が近所の思惑を案じて、何度もやめてくれと頼んでもきかなんだ。ついつい死ぬ年までマセ木を叩き通したと言う。実は猪番が何より楽しみだったそうである。その老人の手すさびに打つマセ木の音が、まだどこか耳の底に響くような気がする。